

NPCに転生したら、あらゆる仕事が天職でした

NPC NI TENSEI SHITARA, ARAYURU
SHIGOTO GA TENSHOKU DESHITA

前世は病弱だから、このVRMMO世界で

やりたかったこと全部やる

著 k-ing
キング

ill. HIDE

2





ラブ

魔法使いを目指す勇者。
面倒見のいい
お姉さん的存在。

ユーマ

拳闘士を目指す勇者。
明るく友達想いだが、
大半の難しいことが苦手。

バビット

飲食店を営む料理人。
ヴァイトのことを気にかけ、
成長を見守る。

オジサン

マーモットの姿の精霊。
他の精霊と違い、
流暢に人語を話す。

ヴァイル

身寄りのない獣人の少年。
助けてくれたヴァイトを
兄のように慕う。

ヴァイト

病弱で寝たきりだったが、
VRMMOのNPCに転生した少年。
元気になった体で、
前世ではできなかった
あらゆることを経験しよう
決意する。

チエリー

森の祠から突如現れた勇者。
ヴァイトに弟子入りし、
日夜行動を共にする。

CHARACTERS

序章 社畜、突然の別れをする

この世界に転生して数ヶ月が経つた。前世では病氣で体を動かすこともできず、ただ息をするだけの日々だったが、転生してからは健康な体で充実した生活に変わった。

この世界で右も左もわからない中、料理人のバビットさんに拾われて、次々と優しい人達に出会って、俺はここでの生活を心のそこから楽しんでいる。好きなだけ運動しても、働いても苦しくないし、おいしいご飯だってお腹いっぱいになるまで食べられる。

そんな楽しい毎日を過ごしていたある日、突然勇者ゆうしゃと名乗る者達が町にやってきた。礼儀正しい勇者もいれば、犯罪行為をする勇者もいる。

勇者達と関わっていたら、いつの間にか俺はみんなから一目置かれる存在になっていた。

「ヴァイト様ー！」

「よかつたら私とも鬼ごっこしてください！」

「俺も仲間にいれてくださいよー！」

そんな俺は、現在勇者達に追いかけられている。

拳闘士(けんとうし)を目指す頭の弱い勇者、「ユーマ」を鍛えたことが町中に広まり、それを知った勇者達が俺に鍛えてもらおうと集まってきたのだ。

トイレをしていても声をかけられるし、昼寝をしていても無理やり起こされる。こんな迷惑行為が最近さらに多くなっているような気がする。

「あいつらどこまで来るんだ!?」

俺は屋根の上に登つて隠れるところを探す。

俺の訓練方法が注目されたきっかけは、町を襲つた強力な魔物である大蛇の討伐の時だ。

俺と関わっていたユーマとその仲間が、大蛇相手に善戦したからだ。

ただ、追つてくる勇者の中には、強くなりたいやつ以外も混ざつてているような気もするが……いずれにせよこのままでは俺のプライベートがないのは変わらない。

「おっ、ヴァイト！ こんなところでどうしたんだ？」

物陰に隠れていますと、後ろから突然声をかけられた。

振り返るとそこには、いつも通り元気な様子のユーマがいる。

ユーマは拳闘士だけでなく、斥候(せっこう)の才能もあったのか、最近はよく一人で隠れながら遊んでいる。

「あいつらがまた追いかけてくるんだ」

俺が下にいる勇者達を指さすと、ユーマは苦笑いしていた。

「ヴァイトはみんなから好かれてるからな」

「勇者は変わり者が多いな……」

「ヴァイトには言われたくないと思うぞ？」

勇者達に比べたら、俺は自分を眞面目で普通なやつだと思つてゐる。

働きすぎの変わり者と言われるが、時間の許す限り好きな仕事をしてゐるだけだ。

そもそも、問題があったのは勇者達の方だ。

前は武器屋を脅したり、ツボやタルを壊したり、家に勝手に侵入したやつもいる。

それに井戸の中に入ろうとしたやつもいるぐらいだ。

井戸の中つて水しか入つてないのに。勇者つて本当に変わり者ばかりだ。

「今日は生産街(せいさんがい)には行かないのか？」

「みんな勇者の指導に忙しいから、暇になつたら行くつもり」

大蛇の討伐以降、戦闘職の勇者の数が減つた。勇者達が町に来てすぐは武器を持って戦う者ばかりだったが、今は生産ギルドに登録し、武器や防具を作る勇者が増えた。

勇者同士で助け合うことを覚えたのだろう。

武器職人のブギーさんや防具職人のボギーさんだけではなく、バビットさんにまで弟子がいるからな。

正直少し俺の居場所がなくなつて寂しい。

「それでもヴァイト、また大きくなつたか？」

「ああ、成長期だからな」

この世界に転生した時は小さくて細かったのに、おいしいご飯と適度な運動で、今では身長が百八センチメートルを超えた。

顔つきもだいぶ大人になつたつて言われることが増えた。

「俺も大きくなりてーな」

「ユーマは身長より頭をよくした方がいいんじゃないかな？」

「なつ、お前!?

ユーマを揶揄うと、ユーマはじやれ合うように俺の腹を突いてきた。

「きゃああああ！ ヴァユマよ！」

どうやら勇者達に見つかってしまったようだ。

俺とユーマの仲のよさが広まり、なぜか「ヴァユマ」とセットで呼ばれることが増えた。

最近では親友同士をセットで呼ぶことが多いと、ユーマと仲のいい魔法使いの勇者、ラブが言つていた。

バカのユーマと一緒にされるのは俺としてはあまり嬉しくないが、親友という響きに悪い気はし

ない。これでもユーマは大事な友達だからセット呼びも容認している。

「ほら、逃げるぞ！」

俺はユーマの手を引いて逃げていく。

「一緒に逃げたら意味がないんだけどな……」

ユーマのつぶやきを無視して町の中を隠れながら逃げていくが、勇者達は一筋縄ではいかない。

「きいやあああああ！」

走りながらふと目が合った女性勇者になぜか驚かれてしまつた。

その声がさらに他の女性勇者に広がっていく。

「ああ、ヴァイトになんて説明しようか……ラブもあんな動画を流す——」

「ほら、行くぞ！」

「はあー！」

ユーマの呟きを遮り手を引くが、後ろからついてくるユーマはずつとため息をついていた。

勇者達をまくために逃げ込んだのは、拳闘士の師匠であるレックスさんの家だ。

俺とユーマが仲良くなつたきっかけの場所がここだ。

「それでも相変わらず汚いな」

「レッケスさんは掃除が嫌いだから仕方ない」

俺はレックスさんの家に入ると、隠れるついでに部屋の中を片付けていく。

レックスさんは怠惰な人で、以前は毎日のように酒を飲んでいて、冒険者として働くことが少なかった。

そんなレックスさんも今では朝から冒険者として仕事をしている。

「相変わらずヴァイトは器用だな」

掃除をしてからササッと料理を作れば、料理人のディリリークエストが終わる。

これをクリアすることで、その職業の適性がどんどん上がっていく。

俺はできるだけ毎日欠かさず、職業体験としてデイリークエストをこなしている。ちなみに今の俺には、これだけの職業のデイリーキュエストが存在している。

【職業】

一 般職

ウェイター 15

事務員
12

販売員11

音楽家5

踊り子 5

今は二十三種類の職業があり、デイリーケーストをすることで数値が1増えて、自由にステータスに割り振れるステータスポイントを3手に入れることができる。

ステータスは元気に仕事をするためにはどれも欠かせないもので、満遍なく割り振つていて。これが現在のステータスだ。

【ステータス】

名前 ヴァイト
STATION
STR-120
ポイント18
DEX-120
VIT-120

一つのステータスだけを上げるとバランスが取れないため、今は一定のポイントが貯まつたタイミングで均等に割り振るようにしている。

「だいぶ外も静かになつたな」

外を確認すると追つてきていた女性勇者達の姿はない。

「じゃあ、またな！」

「おつ……おう」

俺はユーマに別れを告げて、元々の目的地であつた薬師の師匠、ユリスさんの家に向かうことにしてた。

「……そういえば、俺はなんで師匠の家に来たんだっけ？」

ユーマがポツリと呟く。おバカなユーマは女性勇者達をまくためにここに逃げ込んだことを、もう忘れてしまつたようだ。

「こんにちは！」

「よく来たね」

「ヴァイトさん、こんにちは！」

ユリスさんの家に入ると、ユリスさんと勇者のナコが出迎えてくれた。

ナコの働きもあり、ポーションの生産量は少しずつ増えてきて、無事に町のポーション不足は解消された。

もつとも、勇者達が無理な戦い方をしなくなつたっていうのもあるのだろうが。

「私、薬草を探ってきますね」

ちょうど俺と入れ替わるようにナコは、庭に薬草を探りに行つた。

俺もデイリークエストを終わらせるため、邪魔にならないように端で作業をする。

「そういえば、ヴァイトよ」

ユリスさんが真面目なトーンで話しかけてきた。

「何がありましたか？」

「隣町に行く……ですか？」

「ああ、いつもヴァイトと訓練しているやつらも一緒に行くらしいが、ヴァイトも——」
さつきまで一緒にいたのに、俺はユーマ達からそういう話を全く聞いていない。

隣町に行く？ 僕達は友達じゃなかったのか？

俺なんかには別れの挨拶もしたくないという関係なんだろうか。

「あれ？ ヴァイトさんどこに行く——」

戻ってきたナコの姿が見えたが、俺はユリスさんの話で頭がいつぱいで、気づいた時には勝手に体が動き、外に飛び出していた。

「あっ、ヴァイト様だ！」

俺を見つけて声をかける人達もいるが、今はそれどころではない。とにかくユーマ達を探す。だが、いくら探してもユーマはいない。

それどころかいつも一緒にいた勇者のアルやラブすら見つからないのだ。もう町の中にはいないのだろうか。しかし、ユリスさんの話だとナコも一緒に行くと言っていた。

それなら、ナコはまだユリスさんの家にいたのだから、この町にいるのはたしかだ。

「バビットさん！ ユーマ達が隣町に行くって知つてましたか？」

「それぐらい……ああ、そういうことか」

俺は一回店に戻りバビットさんに尋ねる。

バビットさんは何か言うこともなく、ただ、俺を見てニヤニヤと笑つている。

「くくく、ちゃんと別れは伝えた方がいいぞ？」

その後、バビットさんの厚意で夜の営業は休ませてもらい、俺はすぐに荷物を持つて町の出入口

である門の近くで待つことにした。

何も言わずに別れるのは寂しいからな。ただ、なぜ俺には言つてくれなかつたのかと、モヤモヤした気持ちが押し寄せてくる。

こんな気持ちは初めてで、どうしたらしいのかわからない。

斥候スキルの影響もあって、姿を隠しているから、誰にもバレていないだろう。

あいつらが来た時に絶対捕まえてやるからな……

——カーン！ カーン！

大きな鐘の音で俺は目を覚ます。教会が朝を知らせるために鳴らすものだ。

「ふあ!? もう朝か！」

今まで、鐘の音が鳴るまで寝ていたことがなかつた。

門の前で見張つていたつもりが、いつの間にか寝てしまつていたらしい。

すると、門から見て正面の冒険者ギルドの方から、勇者のアル、ユーマ、ラブ、ナコが歩いてきた。

「次の町つて何があるんだろうね？」

「ここにはない職業もあるらしいよ?」

「はあん!? 俺この間斥候になつたばかりだぞ」

「ちゃんと説明を見てないから、そ娘娘るんだよ?」

「何事にも慎重にならないとダメなゲームだもんね」

本当にあいつらって仲がよさそうだな。

「よつ、お前達も行くみたいだな」

門番さんが四人に声をかける。

「隣町なのですぐ——」

四人は笑いながら門番さんと話をしている。

俺は全く知らないのに、なぜか町の人達は前から知つてゐるような口振り。

俺は斥候スキルを解除してユーマ達に近づく。

「おい、俺には挨拶なしか?」

「おつ、ヴァイトじゃないか! 見送りに来てくれたんか?」

あれ、思つていた反応と違う。なぜ、ユーマはこんなに明るく答えるんだ。

バカだからか? もしくは俺なんてどうでもいいってことか?

イライラしてくる。きっと考えすぎて寝不足なのも、関係しているのだろう。

「ヴァイトさん、これには——」

「ナコちゃん、静かに」

喋り出そうとしたナコを、ラブは笑いながら制した。

いやいや、お前達も関係あるんだからな?

友達だと思つていたのは俺の方だけだったのか、そう考へると勝手に涙が出てくる。

「おいおい、ヴァイトどうしたんだ?」

ユーマは心配そうに俺の顔を覗き込む。

「えええ、ヴァイトさんが泣いちゃったよ」

一方ユーマと違い、アルはその場であたふたとしている。

「な、泣いてない! 目からよだれが出てくるだけだ!」

頑張つてこらえようとしても涙が溢れ出てくる。

この感情をどうしたらいいのか、俺にはさっぱりわからないのだ。

「うつ……尊い。^{どうい}もうヴァイトさん推しにはたまらないよ」

「ラブ……」

アルが呆れたような顔でラブを見て呟く。でも、今はそんなことよりも——

「俺はお前達の友達じゃなかつたのか!」

「」「へつ!」「——」



ユーマ達はお互いに顔を見合わせる。

なんだ、その反応は……やっぱり友達だと思っていたのは俺だけだったのか。

「ははは、ヴァイトは俺と離れるのが寂しかったのか？」

ユーマはニヤリと笑う。

「なっ!?」

「ぬうー、ヴァイトさん、ツンデレ属性持ちなのね」

「ラブ少し落ち着いて！ もう、みんなも止めてよ！」

息をハアハアとしているラブをナコは必死に止めているが、俺も怒りでハアハアと息が乱れて

くる。

「俺はヴァイトとずっと友達だぞ！」

「なら、別れも言わずに行くなんて……」「

俺はユーマに掴みかかる。

別の挨拶ぐらいしてくれてもいいだろう。

俺にとつてユーマ達は大事な友達なんだから。

そんな俺の腕にアルは優しく触れる。

「あのー、隣町って半日ぐらいで行ける距離ですよ?」

「へっ!?」

俺はアルの言葉に頭が真っ白になる。半日で行ける距離だつて……？今まで森に行つた時に町なんてどこにもなかつたはずなのに。

こいつらは何を言つてるんだ？

「アップデートで追加されたから。前は見えなかつたもんね」

「ははは、ヴァイトはそんなに俺と離れるのが嫌だつたのか。いやー、嬉しいなニヤニヤと笑うユーマにイライラが收まらない。

そんなに近いとこなら別れもいらぬ。半日の距離なら、俺の足だと数時間で着く。無駄に悩んだ俺はバカみたいだ。そりやー、わざわざ行くことを言わなくともいいわけだ。

「帰る！」

あまりの恥ずかしさに、俺はそう宣言して店に帰ることにした。

昨日の夜からずっと門で待つていたからな。

「おー、またすぐ戻つてくるからよ！」

そう言つてユーマ達は隣町へ向かつた。

第一章 社畜、暇な時間は師匠と遊ぼう

「あー、やることないな」

ユーマ達が隣町に行つてから数日。勇者を鍛えることもなく、空いている時間が増えた。魔物の活動もあれから落ち着いているため、俺が討伐に行く必要はない。むしろ俺が魔物の討伐をしたら、冒險者として生計を立てている人の邪魔になつてしまふ。「久しぶりに休んでるな」

俺を見て、バビットさんが話しかけてくる。

「暇なのも大変ですね」

「うーん、それは大変なのか大変じゃないのかわからんな」

昔は仕込み作業に三十分はかかつっていたのに、今では五分もあればできてしまう。

朝活でデイリーケーストを半分以上終わらせて、営業前に残りを終えたら昼休みにはもうやることがない。

「それなら、散歩でもしてきただどうだ？」

「そんなことしたら大変なことに……ならないな！」

ユーマ達が出発した日、他の勇者達もほとんどが隣町に向かつて町を出ていった。うるさかった町は静かになつていて。

今でも町にいるのは、生産職の勇者達ぐらいだ。

「新しい職業体験ができないか、散歩がてら探してみます」

俺は暇な時間をつぶすため、新たな職業体験を求めて散歩することにした。

「ん？ それは散歩とは言わ……はあー、あいつはいつになつたら休むんだ」店を出ようと歩く俺は、背中越しにバビットさんの呟きを聞いた。

さて、まずは冒険者ギルドに行くことにした。

「こんにちは！」

「ヴァイトくん、また戻ってきたの？」

朝一に冒険者ギルドに行つた時に、事務員のデイリーエストは終わらせた。

ついでに戦闘職のデイリーエストももう全て終わらせている。

「やることがなくて暇なんですね」「

「私達も暇よ?」

そう受付の職員さんが言う。

冒険者ギルドも、勇者達が隣町に移動したことでの以前の静けさを取り戻していた。それだけ勇者達がいたことで生活がガラリと変わっていたのだ。

「たまには俺と模擬戦もぎせんでもするか？」

声をかけてきたのは、剣士の師匠、ジェイドさんだ。

今日は魔物の討伐を行つておらず、冒険者ギルドで他の冒険者と情報共有をしているみたいだ。

「模擬戦ですか？ それなら鬼ごっこの方が——」

「いやいや、俺が悪かった。あれは俺達でも無理だ」

「ん？ 無理じゃないですよ？ 走るだけですし、せつかくなんでみんなで走りましょうよ！」

「「えっ!?」」

ジェイドさんだけではなく、近くにいた冒険者達の声が重なる。

魔法使いのエリックさんを中心に冒険者達がジェイドさんを睨んでいた。

みんなそんなに走るのが苦手なんだろ？

「決まりです！ みなさんと鬼ごっこしたかつたんですねー！」

師匠達や冒険者達に微笑むと、みんなため息をついていた。

俺に誘われた彼らは、渋々と訓練場に向かつて歩いていく。

「俺達今日で死ぬのか？」

「さすがに死ぬ手前でやめてくれるよね？」

「でもあの勇者達を見ていたらね……」

「はあー」

弟子相手に逃げるのも悪いと思ったのか、みんな渋々だが参加してくれそうだ。本当に師匠達にも恵まれている。

「レックスさんも行きますよ」

「いや、俺は家の掃除が……」

禁酒を始めたレックスさんが家に帰るうとするが、俺はすぐに腕を掴んで連れて行く。

「それなら今日の朝もやつておきましたよ？」

「ああ、いつも助かるな。つておいおい離してくれー！」

訓練場に着いたら、早速ルールの確認だ。

「俺が鬼でみんなが逃げる方でいいですか？」

「あー、この際反撃するのもありにしたらどうだ？」

ジェイドさんが鬼ごっこに新たな提案をしてきた。

「僕もあまり走れないので、そっちの方が助かります」

エリックさんもそれには賛成していた。

「そもそも鬼ってなんだ？」

ジェイドさんが聞いてくる。たしかにこの世界に鬼は存在しない。いや、地球にもいないが……

「えーっと、オーラみたいなやつですかね？」

「なら、尚更^{なむちん}反撃しないとダメじやないか！」

うーん、でも冒険者達が反撃したら、それはもう鬼ごっこではなくなってしまふ気がする。

「これでヴァイトが流されたらしいね」

「でも、あいつ地味に頭がいいぞ？」

師匠達はコソコソ話し合っているが、俺には丸聞こえた。

「それだと模擬戦になりますよね？」

「チツ！ 気づいたか！」

師匠達は俺と模擬戦をしたかったのだろうか。その方がいいなら……

「模擬戦をするなら、武器を家に取りに帰らないと——」

「いやいや、あの矢が当たつたら、俺達死ぬぞ？」

あの矢とは、俺が大蛇相手に使ったショートスピア型の矢のことを言っているのだろう。

普通の矢よりも重いため扱うのは難しいが、その分威力は抜群に高い。

さすがに師匠達なら、怪我はするにしても、あれくらいでは死はないだろう。

「聖職者スキルでいくらでも回復できるから大丈夫——」

「ぜひ、鬼ごっこでお願いします！」

気合の入った返事が聞けたので、俺は嬉しくなつて笑いかける。

「じゃあ、逃げてくださいね」

「ヒイ?!」

どこからか悲鳴のような声が聞こえたが、俺は気にすることなく、目をつぶつて三十秒数える。

師匠達とする鬼ごっこはいつぶりだらうか。楽しみだ。

前世ではこうやって元気に大人と遊ぶことってほとんどなかつた。

記憶にあるのは電動車椅子に乗つて、必死についていつたことぐらいだ。

三十秒数え終え、俺はゆっくりと目を開ける。

「よし、行きました……あれ?」

しかし、師匠達や冒險者の全員が訓練場からいなくなつてている。

「あいつらなら町に逃げて行つたぞ?」

そこに、隣の小屋で様子を見ていた解体士のおじさんが、そう教えてくれた。

どうやら町の中全てを使って鬼ごっこをするらしい。
そういうことなら、俺も全力で追いかけるまでだ。



俺は愛用の剣を冒險者ギルドに置いて、門の近くまで一気に走つた。

ヴァイトとの鬼ごっこは、延々と追いかけられて、終わりのない地獄だ。

いつも勇者達とやつているのを見ていたが、見てるだけでも、魔物達に囲まれている方がよっぽどましだと思うほどだった。

「ジェイド、そんなに急いで——」

「シャーー!」

門番が声をかけてくるため、俺は静かにするようにジェスチャーをした。
ヴァイトはこの町の中で一番足が速いからな。いつもパツと出で……

「まいーつけた」

どこからかヴァイトの声が聞こえた。

斥候スキルも持つてゐるため、あいつの存在は認識しつらい。

周囲を見渡すと、ニヤリと笑うヴァイトが背後に立っていた。

「うわああああああああ?!」

俺はヴァイトに捕まつて……しなかつた。

「はい、じゃあ他の人を探しますよ」

「えっ?」

ヴァイトは俺の体に縄を巻きつけた。

……何をするつもりだ?

足に力を入れて急に走り出すヴァイト。

縄に繋がれた俺がどうなるかはすぐにわかるだろ。

「うおおおおおおお!」

そのまま俺はズルズルと引っ張られる。これは強制的に走らないといけないってことだろ。

ヴァイトに捕まつた俺はただひたすらに走るしかなかつた。

◇ ◇ ◇

僕はバビットの店に逃げ込んだ。

「少し匿つてくださいー!」^{かくま}

「ん? ハリックどうしたんだ?」

「ヴァイトに追われているんですねー!」

「ヴァイトもまさか、僕がここにいるとは思わないだろ。

体力がない僕はひつそりと隠れて、見つからないように逃げ切る予定でいる。

他のやつらは僕と違つて、ただ逃げることしか考えていない。

バビットは不思議そうな顔で僕を見ていた。

さすがに誰も考えつかない案に、僕は笑いが止まらない。

あつ……笑つていたら見つかってしまう。

「それなら意味ないぞ?」

え? 意味がないとはどういふことだ?

「ずっと前から田の前にいますよ?」

「へ?」

『気ついた時には目の前にヴァイトがいた。

「うわあああああ!」

あまりの驚きに、僕はその場で叫んでしまつ。

ここには姿が見えない魔物なのかと思つぐらい、急に現れたのだ。

斥候の才能があるからって、ここまで実力があるとは思わなかつた。

「エリックさんの魔力はわかりやすいので、すぐに見つけられますよ?」

「それってどうしたことですか?」

魔力で人を判断する。そんなことができる人物なんて、

おのきゅう まどりの しとん ぐりじだ。

ヴァイトはそんな力まで持つてゐるのか。

「んー、なんとなくですが、知つてゐる人の魔力や雰囲気つて感じ取れるんですよね」

どうやら魔法使いとしての実力だけではなく、他の才能も相まってヴァイト特有の能力が開花したのだらう。

「くくく、さすが僕の弟子だよ」

「ありがとうございます」

そう言つてヴァイトは僕に縄を巻きつけてきた。

これは何をやつてゐるのだろうか?

「じゃあ、行きますね?」

「えっ?」

まだ立ち上がりつてもない僕を引きずつて、くくヴァイト。

店の外に出ると、他の冒険者達も縄に縛られた状態で捕まつていた。

「ジェイド……もう捕まつっていたんだな?」

「ああ、俺は一番初めだったからな。こいつの訓練は地獄を超えていた……」

ジェイドの顔はどこかやつれていた。

いや、ジェイドだけではない。

「疲れたなら回復属性魔法を使いますね」

ヴァイトは一人ずつ疲劳を管理して、回復属性魔法をかけていた。

そんなことされたら永久に走れる人間になつてしまつ。

ああ、これは地獄です。

◇ ◇ ◇

「鬼ごっこなんてやつてられるか!」

すぐには家に帰つて来た俺は久しぶりに酒を飲もうと準備をする。だが、いつも置いてある場所に酒がない。

「ヴァイトのやつ、隠しやがつたな!」

「ちゃんと働かないレツクスさんが悪いんですよ？」

「いやいや、そんなこと言つても俺の楽しみ……ぐわあ!?」

「はい、撫でてました」

いつの間にか体に巻きつけられた繩

拳闘士として速さと俊敏さが自慢だったが、

いや、俺はまだ酒を一滴も飲んでない。

【これ以上酒を飲むなら、掃除に来ないですよ?】

——ツ——リと微笑む。アイトは、俺はすぐに頭を下げる。

一掃院だけにお願いします！」

アバイトがいなければ、俺の家は一三屋敷になるからな。

（こゝで）に美咲じいご飯もしくは用意してくれる
だらく

こんな嫁がいた

シヤ 実アイトみかしな女た嫁ガ三十九
一生酒が食

三才圖會

外にはぐつたりとして動かなくなつた仲間達。

いつも仲良くなっているジエイドやエリックはすでに捕まっていたようだ。

エリックなんてフツフツと何かずっと呪術のようなことを語つてゐる。

「アーリー・リード」の発明者、ジョン・マッケンゼイ。

「本当にやることがなくなってきたな……」

「今日は鬼ごっこはしなくていいのか？」

俺が呟くと、バビットさんが聞いてくる。

「ああ、
そ
うか……」

師丘達との鬼ごっこ

師匠達との鬼ごっこはあれ以来、もう何日も続いている。最近は走る時間を朝に変えて、短い時間で効率よく鬼ごっこをするようになった。

それはそれでどうかと思うが、遊びに見えてあれば特訓だからね。ちなみに、師匠達を縄で縛り続けていたら、新しい職業が増えた。

【デイリーケースト】

職業
繩士

縄で一日一回対象物を縛る（1／1）報酬：ステータスポイント3

対象物のため、人間ではなく物でも問題ない。

「しません！」

今日も昼の営業から、師匠達はお店にご飯を食べにきている。

あれからジエイドさんは会うたびに鬼ごっこを求めてくるようになった。今まで問題だつたスピードや持久力が改善されことで、さらなる高みを目指したいと目標ができたらしい。

卷之三

一方、エリックさんはあれから人が変わってしまったのか、穏やかではない。
最近は呪術に目覚めて、魔法使い以外に呪術師という才能が芽生えたらしい。

その影響か常に変わった呪文を唱えている。そのうち俺も教えてもらうつもりだ。

「レックスさん、今日も掃除とご飯を——」

レックスさんは規則正しい生活をするようになつた。

以前の堕落した生活とは打って変わつて、掃除と食事の準備も少しづつ自分でできるようになった。

最近は鬼ごっこに誘つても、家事があると断られてしまう。

そんなレックスさんの変化は、町でも騒ぎになつておらず、主婦達から「夫を変えてほしい」と声をかけられることが増えた。

そんな変化はあつたものの、相変わらず俺は時間を持て余している。

冒險者ギルドからは弟子をとつたらと言われるが、今は弟子になりたがる人や勇者がいない。そもそも俺は弟子に何を教えればいいんだ。

「今日は外に行つてきます！」

「気をつけろよ！」

昼の営業を終えた俺は、装備を整えて、町の外に出ることにした。

今日は森の近くにあると聞いた祠(ほり)に行つてみようと思う。

勇者達はみんなその祠から召喚されているらしい。そう聞いて、謎の祠に少し興味が湧いたのだ。

しばらく歩くと、木製の屋根が見えてきた。

祠(さぶらん)つていうと祭壇(さいだん)がある、厳かなものを想像していた。

「これが祠で合つてているのか？」

だが、目の前にあるのは小さな小屋と、地面に円形に書かれた文字だけだつた。

祠から勇者が出てきたつて聞いたが、人ひとりしか入れないほどの大きさだ。

あれだけの人数の勇者がここから本当に出てくることができるのか……

周りの文字を読んでみると、何が書いてあるのかわからない。

日本語でもないし、この国の言語でもない。

「まあ、勇者は謎の人物だつてことだな」

祠には何もないで帰ろうとしたら、突然祠が光り出した。

あまりの眩しさに俺は目を閉じる。

「わあー、本当に別の世界だー」

突然声が聞こえてきた。さつきまで祠には誰もいなかつたはず。

俺は大きく一步下がり、警戒(けいかい)を強める。

「誰だ！」

「あのー、町に行きたいんですけど、どっちに行つたらありますか？」

その声を聞いて、俺の中で何かがざわめき出す。

まさかこんなところにいるはずがない。ただ、声があいつに似てゐるだけ……

「さ……ぐら……？」

「えつ……私の名前はチェリー・フローラですけど?」

「あ、ああ、すまない」

きっと目の前にいる人物は勇者だろう。前世の妹である咲良がこんなところにいるはずがない。

それに雰囲気はどことなく妹に似ているが、胸が大きく身長も高い。

咲良はもつとチンチクリンだったからな。いや、記憶にある咲良が小さいだけで、最期のころは目があまり見えなかつたから、成長していくてもおかしくないよな。

「えーっと……チェリーだつたかな?」

「はい!」

明るい返事にちよつと戸惑つてしまふ。

「えーっと、町に行きたいんだよね?」

「連れて行つてくれるんですか?」

「ちようど町に帰ろうとしていたからね」

俺はチェリーとともに町に向かつて歩き出した。

見た目と中身にどこかギャップを感じる勇者。

大人っぽい見た目なのに、声と話しか方は幼さが残つているような気がする。

その後も話しながら、謎の勇者チェリーを町まで案内していく。
歩くのが遅くて抱えてしまおうかとも思つたが、ナコのことがあつたので、ゆっくりと歩いて
いる。

「勇者達はああやつて突然出てくるのか?」

「あー、そうみたい、ですね? 私もいまいちわからなくて……」

「なんか大変だな」

「えつ……ええ」

会話が途切れてしまい、風が吹く音さえも聞こえるほど静かだ。

初対面の女性つてこんなに話しづらかつただろうか。

女性つて言つても関わるのは、ナコとラブぐらいだからな。

ラブなんて最近は雄叫びのようなものをあげてていることもしょっちゅうだ。

「あのー、町に行つたら最初に何をしたらいでですか?」

「ん? 何をしたら……あつ、ツボやタルを割るのはダメだぞ。あと、不法侵入もやめた方がいい」

「本当にチュートリアル。勇者達がよく言う、俺の知らない言葉だ。

「そのチュートリアルっていうのはなんだ?」

「この世界に来る前に少しだけ説明みたいなものがあるんです。そこでさつき言われたことや、何があつたら町の人達と関わるようについて言われてます」

この世界に来る前に説明があるらしい。

つまり、勇者達は別の世界からこの世界に召喚されている。

きっと神様のような人が、俺達を心配してくれて説明しているのだろう。

そんな話をしていると、いつの間にか町が見えてきた。

何を話せばいいのか悩んでいたが、気づいたら時間が過ぎていた。

「ありがとうございます！」あとは町の案内をしてくれる人を探して——

「それなら俺がしようか？」

町の案内ならアルにしたことがある。

勇者は何をやらかすかわからないから、俺がついていた方がいいだろう。
「では、お願ひします！」

俺はそのままチエリーに町の中を案内していく。

「すごいリアルですね！」

チエリーは初めて見る町に興味津々なんだろう。アルもびっくりしながら見ていたからな。

「おっ、ヴァイト！ ついに弟子を取ったのか？」

「いえ、新しい勇者に町を案内しているんです」

声をかけてきたのはいつも買い物に行っている肉屋の店主だ。

チエリーが俺の弟子に見えたのだろう。軽く返して、俺は案内を続ける。

その後も町の案内をしていると、同じようにみんなから声をかけられる。

「あのー、ヴァイトさんでお名前合ってますか？」

「ああ、自己紹介していなかつたね。俺はヴァイトだ」

「さっきからみなさんが言っている弟子ってなんですか？」

「弟子ってのは職業の見習いのことだな。たしか勇者だと二つの才能があるって聞いたぞ」

「ちなみにヴァイトさんは何をされているんですか？」

「俺はヴァイトニストだ」

「ヴァイトニスト？」

チエリーには伝わっていないようだ。

まあ、ヴァイトニストってたくさん仕事を頑張っている俺の行動を見て誰かが造つた造語だしな。
剣士なら主に剣を持って戦う人だし、魔法使いなら魔法を使う人。

それならヴァイトニストは俺の生き方から造られた言葉だから、働く人つてところだろうか。
いや、それだとみんなと同じになつてしまふ。

「うーん……たくさんの中を学ぶ職業？ みたいな感じだよ」

「だから弓や盾を背負って、剣も持っているんですね」

「ああ。あ、どんな職業でも見習いの間は外に出るなよ？ 他の勇者達が見習いの時に外に出て、

問題になつたからな」

「気をつけますね」

俺はその後も三つのギルドやお金の話など、できる限りの知識を伝えた。

「あとは宿屋ですね」

「宿屋……あれ？ こここの宿屋ってどこにあつたかな？」

たしか勇者達は宿屋に泊まつてると、ユーマから聞いた。

ただ、俺は一度も宿屋を見たことがない。

宿屋なら新しい職業体験ができるような気がする。

そう思いながら、チエリーとともに町の中を歩き、俺達は宿屋を探す。

「全然ないです……」

「こんなに宿屋ってないものなのかな？」

勇者達が泊まるつていうぐらいだから、宿屋は大きいはず。

そう思つていたのに、全く見つからなかつた。

「ちょっと家に戻つて、聞いてもいい？」

俺は一度店に戻り、町に詳しいバビットさんに聞くことにした。

「ヴァイトおま……女か？」

帰ると、バビットさんはどこかニヤニヤしながら聞いてきた。

バビットさんの視線の先にはチエリーがいる。どこから見てもチエリーは女性にしか見えない。
もしかして男性に見えるのだろうか？

「どう見ても女性ですけど？」

そんな俺を見てバビットさんは大きなため息をついていた。

どうやら俺は何か答えて間違えたようだ。

「はあ、それでどうしたんだ？」

「宿屋を探していて……」

「宿屋か？ それなら近くに……あれ？ 俺もうまく思い出せないぞ？」
町に詳しいバビットだが、なぜか宿屋に関して思い出せないらしい。

俺達が見つけられない勇者が泊まる宿屋。

その後も町の人達に聞いて回ったが、誰も宿屋の場所を思い出せなかつた。

結局宿屋を見つけられなかつた俺達は再び店に戻つた。

「宿屋はあつたか？」

バビットさんが聞いてくる。

「いや、全然ないです。商業ギルドに行つてもわからなかつたです」

「私のために長いこと付き合つてもらつてすみません」

どういうわけか、この町には宿屋がないという摩訶不思議なことが起きていた。ならユーマ達はどこにいたのだろうか。それを知るのは勇者だけなんだろう。

ただ、同じ勇者なのにチエリーがわからないのはなぜだ？

以前ナコがユリスさんの家から出ていった時は、別の場所にいるとだけ言われた。これはユーマ達が帰つてきた時に聞く必要がありそうだ。

「まあ、宿屋がわかるまでうちにいたらいい。この際、ヴァイトが師匠になつて一人前になるまで面倒を見てあげたらどうだ？」

「俺がですか？」

そんな話をすると前に ^{ヘッドアップディスプレイ}HUD システムが現れる。

【転職クエスト】

職業 ヴァイトニースト (OM職)

『デイリークエストを一日十件、十日間連続でクリアする (0／10)

報酬：ヴァイトニーストに転職する。全ての職業が解放される (師匠と同様の職業のみ)

「やつぱり俺だとこうなるのか」

バビットさんは見えていないだろうが、俺と勇者のチエリーには見える。

「これでヴァイトニーストになれるんですね？」

「ああ、そういうことらしいな」

初めてなのか、出てきたHUDシステムにチエリーは触れて確認していた。

「おいおい、さすがに考えてから——」

「あっ、押しちゃいました……」

「はあー、遅かったか」

俺の制止も間に合わず、どうやらチエリーはヴァイトニーストの見習いになつたようだ。

「それでデイリークエストってなんですか？」

あの内容だと一日十件デイリークエストを受けないといけない。

すでに時間は少なくなつて、夜の営業も近づいてきている。

しかも、クリアできなければ日数が初期化されるという最悪なパターンだ。これが勇者達がよく言つていた鬼畜(きじゆく)ってやつだろう。

「バビットさん、調理場を借りますね」

俺は説明を兼ねて、早速チエリーを調理場に連れて行く。

「わあー、本当にお店の調理場だ」

「飲食店だからね？」

とりあえず俺はチエリーに、野菜を洗つてサラダを作るよう伝えた。

どうやつてディリーエストが現れるのかがわからない。

まずはディリーエストを十種類出してから、内容の確認をする必要がある。

俺の時は何かしらきっかけがあつたが、チエリーも同じだろうか。

「あつ、ディリーエストが出ました」

「どんな内容だ？」

「えーっと……料理を五品作るつて書いてあります」

「五品!?」

「それをクリアするとステータスポイントが3ももらえるらしいです」

どうやらディリーエストの難易度が俺よりも高くなつていてるようだ。

ただ、幸いなことに報酬でステータスポイントがもらえるならどうにかなるだろう。

「あつ、すみません。ヴァイトイニストになつてから、まとめてもらえるらしいです」

「あー、人生そんな簡単じゃないよな」

俺の期待が一気に崩れた。さすがにいくらなんでもヴァイトイニストの道は厳しすぎるだろ。

このままだと見習いから一生抜け出せないような気がする。

ただもうあとの祭りなので、まずはディリーエストを出すところから始めることにした。

「よし、木剣を持つて振つてみて！」

「やつてみます！」

ここは冒險者ギルドの訓練場。チエリーは木剣を持ち上げると、そのまま振り下ろす。回数を重ねるとチエリーは突然声を上げた。

「あつ、ディリーエストが出ました！　えーっと、剣士で一日百回素振りを——」

「百回!？」

どうやらディリーエストが俺より大変なのは、ユーマや他の勇者と変わらないようだ。それに問題は山積みだった。

「……十回くらいで限界です」

チエリーは十回くらい木剣を振つたら、力がなくて落としてしまつた。

これは、あまりステータスに関係なくできるディリーケエストを選ばないといけないようだな。

「じゃあ、手を握つてもらつてもいいか?」

「手ですか!?」

手を握るくらいならべつに気にしなくてもいいだろう。

俺もエリックさんと手を繋いで魔法使いの才能があるつて言われたからな。

どうしようか戸惑つているチエリーの手を、俺は取つて握る。

俺はチエリーに魔力を送り、精神統一に必要な魔力を感じてもらう。

「何か感じる?」

「あつ……あの、熱いです!」

チエリーはなぜかさくらんぼのように真っ赤な顔をしていた。

魔力を流している途中なのに、チエリーは手を放した。

俺の何がいけなかつたのか?

その場で考えるがなかなか出てこない。

「あつ……これつてまさか!?」

俺は入院している時によく看護師が言つていたことを思い出した。『一〇五号室のおじいちゃんが手を触つてセクハラしてくるんですよ』頭の中では手を触つてセクハラの言葉がグルグルと回つている。

「すみませんでした!」

俺は何か言われる前に土下座をして謝ることにした。

生まれて初めて土下座をするなんてな……

俺はどうすればいいのかわからず、そのまま土下座の状態で思考停止してしまつた。

「あつ、頭を上げてください」

俺は言われた通りに頭を上げる。

「いやいや、そこは立ち上がつてくださいよ! 別になんとも思つてないですよ」

チエリーが言うなら、セクハラではないのだろう。

どこか目の前にいるチエリーは戸惑いながらも笑つていた。

体が動かなかつたから、前世ではセクハラやパワハラとは無縁だつた。ただ、これからは気をつけないといけない。

「それで、魔法使いは精神統一を行えばいいらしいですよ」

どうやら回数的には俺のディリーケエストと比較して、五から十倍になつてゐるみたいだ。

「よし、じゃあ簡単なやつからデイリーエストを探しにいくか」

そのまま弓使い、斥候、槍使いと俺が才能のある戦闘職や、ブギーさんやボギーさんなどがいる

生産街に連れていった。

今日だけで町の中を何周回っているのだろうか。だが、そのおかげでほぼ俺と同じ職業体験ができるようになった。

ほとんどは俺がきつかけとなっていたため、そこは本当に弟子のような感じがした。

俺達が店に戻ると、ちょうど夜の営業が始まつたところだつた。

勇者の見習い料理人やウェイターが隣町に向かつたため、バビットさんは慌ただしくしている。

「今すぐ準備します」

俺はすぐにお客さんの注文を取るために、バタバタと移動する。

「チェリーも働いてみるか？」

「やつてみます！」

チェリーは早速ウェイター……いや、ウェイタレスとして働いてくれる。

しかし、席やメニューを覚えるのは、さすがに無理だつたので、案内を任せることにした。

「おっ、お嬢ちゃん、ヴァイトの弟子らしいな」

「はい！」

噂は早く、冒険者達は俺が弟子を持ったことをすでに知つていて「振りだつた。

「あー、なんていうか。大丈夫か？」

「もうヘトヘトですね」

チェリーの言葉に、店内にいる人達は俺を見てくる。

そんなに俺は大変なことをさせているつもりはないけどな……

一日中歩いていたのが問題なんだろうか。これはパワハラというものになるのか？

「まあ、しつかり休めよ？ あいつはちょっと変わつてているからな」

「そうですね。さつきも急に土下座してきたので」

「……」

チェリーの言葉に店内は静かになる。

うん？ その言い方だとかなり誤解を招きそうだぞ。

俺が危ないやつに聞こえてしまう。

ひょつとしてチェリーもあの赤髪の勇者と同様に、インテリジェンス INTが低めの頭が弱い子なのか？

だが、そんなことより、あまりにもお客様達からの視線が不快だ。ここは必殺技の出番だ。

「みなさん、そんなに鬼ごっこがしたいんですねか？」

俺はニコリと微笑んで一人ずつ目を合わせる。

立ち読みサンプル はここまで